

なっしょん

2016 春
SPRING



奈良教育大学イメージキャラクター
「なっしょん」

奈良教育大学 広報誌

NARAYAMA

NARA UNIVERSITY OF EDUCATION'S
SEASONAL PUBLICATION

<題字>名誉教授 池田 桂鳳

特集

教員になるための 4年間の学び

羅針盤

大学生が届ける「つくりだす喜び」
～曾爾村立曾爾小学校での
わくわくアートプロジェクト～

クローズアップ

赤ちゃんをみつめて
家庭科教育講座 中川愛准教授

ラボ・レター

数学教育学
舟橋友香研究室

なっしょん's CLUB企画

授業紹介



CONTENTS



2	特集 教員になるための4年間の学び
7	羅針盤 大学生が届ける「つくりだす喜び」 ～曽爾村立曽爾小学校でのわくわくアートプロジェクト～
10	クローズアップ 赤ちゃんをみつめて 家庭科教育講座 中川愛准教授
13	ラボ・レター 数学教育学 舟橋友香研究室
14	ひと・あれ・これ 桜井市立桜井西中学校 仲西稚奈さん
15	なつきょん's CLUB企画 授業紹介 ～留学生と国内学生がともに学ぶ 異文化理解研究・現代日本論～
17	留学生レポート リヨン第三大学(フランス) 上條 沙恵子さん、 シャロワ エミリー コリヌさんとアンドレス ジョナス マクシムさん
19	キラリ☆奈教生 近畿地区国立大学体育大会「剣道の部(個人戦)」で第2位に入賞した 千葉文乃さん
20	フカツ魂! 弓道部
20	活躍する奈教生
21	キャンパスニュース
22	奈良に息づく仲間たち
23	奈教生に聞きました! 奈教で得たもの

表紙のはなし

教員を目指し共に学ぶ仲間

毎年、教員になることを目指してたくさんの学生が、奈良教育大学へ入学します。
写真は、入学してからちょうど1年になる1回生が、教室で仲間と共に学んでいる様子です。
奈良教育大学の学生は、良い教員になるという高い目標のもと、仲間と協力し切磋琢磨し、日々学び
続けています。



特集

教員になるための 4年間の学び



教員養成大学である奈良教育大学では、学生が卒業後に、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校で即戦力として活躍していくことができるように、4年間を見通したカリキュラムを編成しています。学生は、教員としての基礎的な教養をベースに、各教科等の内容と指導方法に関する知識と能力を身につけていきます。同時に、学校教育に対する期待や要求が高まるなかで、ますます高度化・複雑化する教職に関する知性を磨いていきます。学生は、「教科系列」および「教職系列」と呼ばれている科目を学ぶことで、これらの課題にチャレンジしていきます。

「教科系列」と「教職系列」はいずれも、大学の講義室での学びを中心に展開されます。両方の系列で学んだ知識や能力を実際の学校現場に適用し、教育実践力を磨いていくのが、「実践系列」と呼ばれる科目です。



「実践系列」の科目では、学校現場のリアルに直面します。高学年になると、教育実習生という立場で学校現場の課題に自分の力で立ち向かっていきます。「実践系列」での学びを通して、卒業後に教員として働くための実践的な知識を蓄えるとともに、やりがいはあるけれども苦しいことも多い教員という仕事に就くための「覚悟」を決めていきます。そういう意味では、「実践系列」は、「教員という仕事に就く自分」を見つめるためのキャリア教育的な役割も果たしています。



「実践系列」はすべての科目が必修科目であり、とくに1、2回生の科目については、すべての単位を修得しないと3、4回生の教育実習に赴くことができない仕組みになっています。条件はシビアですが、教育実習では実際に子どもたちに教育指導を行うという重い責任がありますので、こうした科目をしっかりと履修し、子どもの前に立つために必要な知識や能力を身につけることが必要となります。

	1 回生前期	1 回生後期	2 回生前期	2 回生後期	3 回生	4 回生前期	4 回生後期
科目名	教職入門	現代教師論	教育実習 スタートアップ	教育実践 基礎演習	教育実習事前指導 教育実習（主免許） 教育実習事後指導	教育実習（副免許）	
			(介護等体験)			教職実践演習	

次のページからは、これらの科目のうち、「現代教師論」（1 回生後期）、「教育実践基礎演習」（2 回生後期）、「教育実習」（事前事後指導含む、3 回生前・後期）、「教職実践演習」（4 回生後期）の4科目の学びについて紹介していきます。



現代教師論

1回生後期の「現代教師論」は、4年後に自分がどのような教員になりたいかというイメージを形成することを目指す科目です。様々な教育現場の話聞き、見学に行った上で、考えを交流します。以下、授業の特色について紹介します。

特色1 教員のしごととその魅力にふれる

幼稚園、小学校、中学校、特別支援学級といった様々な教育現場で長く働かれている先生方の実践に学ぶことができます。それぞれの教育現場での子どもの姿、子どもの成長・発達を支援する教員のしごと、その苦労ややりがいについて伺います。また、様々な教育現場を広く見渡すことで、視野を広げることができます。



特色2 教育現場に学ぶ

大学の附属学校園に授業見学にいき、日々の教育実践の一コマに触れます。教育実習で会う子どもとの最初の出会いの場でもあります。「教員の目線」にたつて授業を見ると、子どもの立場で授業を受けていた時には気付かなかったことが見えてきます。学ぶ側から教える側への視点の転換は、教員を目指す上での大切な一歩です。

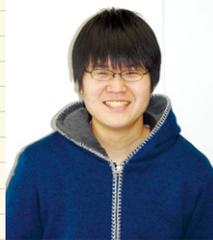


特色3 今後の学びの方針をつくる

先生方の話を聞き、学校園の見学をした後は、グループで気づきや学びを交流します。同じ話を聞いても、同じ授業を見ても、人によって受け止め方は様々です。交流の中で自分の考えを深めることで、自分が目指す教員像を少しずつ形成していくことができます。また、そのような教員になるために必要な学びは何かという視点から、2回生以降の学びの方針を立てます。



受講者の声



教育学部
学校教育教員養成課程
教育発達専攻
教育学専修 1回生

ちんぜい しょうた
鎮西 晶太 さん

私立 奈良学園高等学校出身

この講義を受けて、幼・小・中・特別支援の先生の苦労や働きがいを知ることができました。

学校見学では、現場の空気や先生方の工夫をこの目で見て感じる事ができ、教師という仕事のあり方や子どもとの接し方について深く学ぶことができました。

最後のディスカッションでは、個を見ることと、全体を見ることのバランスが重要だという考えがもっとも心に残りました。講義を通して、教師になる一歩が踏み出せたのではないかと思います。



教育実践基礎演習

2回生後期の「教育実践基礎演習」では、初めて継続的・体系的にリアルな学校現場の姿に迫っていきます。とくに「教育実践基礎演習」では、「現代教師論」で獲得した「教員の目線」から、子どもたちの成長や発達について具体的な事実をもとに理解を深めていきます。

「教育実践基礎演習」は、翌年度の「教育実習」での実習校種によって、「幼稚園クラス」「小学校クラス」「中学校・高等学校クラス」の3クラスで展開しています。各クラスは、幼児教育、小学校教育、中等教育を専門分野とする大学教員が担当しています。また、附属幼稚園、附属小学校、附属中学校および外部の公立学校園の現職の教員も、講話や演習を担当しています。

プログラムは3クラスで異なりますが、以下では小学校クラスを例にあげて、授業を紹介します。

小学校クラスで学ぶ内容は、大きく3つに別れます。

まず、

1

小学生の成長発達とそれを支える教育のありかたについて、附属小学校の教員が「講話」を行います(低学年、中学年、高学年、特別支援学級)。

次に、

2

講話に対応する学年の授業を附属小学校の教室で「観察」します。ただぼんやりと授業を眺めるのではなく、観察の際は、事前に決めた観点にもとづいて、詳細な観察記録を取ります。

そして、

3

観察した事実に基づいて、授業における子どもと教員のありようについて「研究」を行います。

8名程度の小グループに分かれ、自分たちが取った記録と、事前に授業担当者が作成した授業分析用の資料をもとにして、ワークショップ形式で授業の事実とその意味を深めていきます。



授業後のコメントカードより

3つのことを学んだ。まずは附属小学校の教育実践の考え方である。附属小学校では児童が主体という考え方で授業がされている。児童の発言により授業が進んでいたのが印象に残っている。…(中略)次に授業における児童の実態である。国語や社会などの座学は席や個人のやる気により集中度が違った。…(中略)児童が主体となる授業では興味のない内容であると学びが薄くなると感じた。最後に教師の児童への接し方である。集中度・理解度に個人差が出てしまう授業で、教師が集中していない児童を指名して発表させていたことが印象に残っている。教師の働きかけにより個人差は少なくすることができると思った。

子どもたちに対して授業や保育をすることは、単純に見えて実に奥深いものです。「教育実践基礎演習」を通して、「傍観者」ではなく「主体者」として、こうした実践に関わっていくための知識と態度を身につけていくのです。



教育実習 + 事前事後指導

教育大学の学生にとって最も重要な教育機会が教育実習です。奈良教育大学では、3回生に主免許(卒業要件になっている学校種の教員免許)を取得するための「教育実習」を配当しています。ちなみに、副免許(主免許以外に取得する学校種の教員免許)を取得するための「教育実習」は、4回生に配当しています。ここでは、3回生の主免許「教育実習」について紹介します。

奈良教育大学は教員養成大学であり、教育実習を修了し、教員免許を取得することが卒業の必須要件になっています。このため、すべての学生は、3回生に配当されている主免許「教育実習」において、2~4週間(学校種によって実習期間が異なります)の教育実習に臨みます。原則として附属幼稚園、附属小学校、附属中学校のいずれかで教育実習を行います。それ以外の実習協力校に赴くこともあります。

教育実習は、教員になるための学習の一環ですが、学校園の子どもたちにとっては、一回限りの貴重な教育機会です。子どもたちの成長・発達に影響を与えるため、生半可な知識・技能と学生気分の態度で子どもたちの前に立つことは許されません。このため、教育実習に臨むまでに念入りな「事前指導」を受講します。

奈良教育大学では、4~7月の4ヶ月間にわたって「事前指導」を展開しています。2回生の「教育実践基礎演習」と同じく、「事前指導」も、教育実習を行う学校種によって、「幼稚園クラス」「小学校クラス」「中学校・高等学校クラス」の3クラスで展開されています。「教育実践基礎演習」では子ども理解を深めることが主な目標でしたが、「事前指導」では子どもたちの成長・発達を促すための具体的な指導技術・方法について学びを深めていきます。



クラスごとの学習内容は、次のとおりです。

幼稚園

リズム・表現・運動あそび、
保育環境構成、特別な配慮を必要とする
幼児の指導、教育課程と指導計画、
保育案の指導と立案、保育観察、
保育参加実習

小学校

学習指導案の作成、
各教科の授業づくり(国語、社会、算数、
理科、音楽、図工、体育、家庭)、
特別な教育的ニーズを持つ子どもたちの指導、
授業観察、授業協議

中学校・高等学校

学級経営、特別活動、総合的な学習の時間、
図書館教育、学校保健、
授業観察(各教科、特別支援学級)、
授業協議、実践研究(各教科の指導法)

まもなく子どもたちの前に立つことへの期待と責任をひしひしと感じながら、「事前指導」を受講し、本番の「教育実習」に立ち向かっていきます。

「教育実習」を通して、大学の講義室では学べない学校教育の圧倒的なリアルさに直面し、全身全霊をかけて「教育実習」に臨み、これまで感じたことのない充実感を得ます。一方で、認識不足・力量不足によって、子どもたちに十分な教育指導を行えなかった無力感も同時に味わいます。「教育実習」で感得したこのような気持ちを言葉にし、同級生や指導を受けた大学教員や教育実習校の教員に分ち伝えることで、「教育実習」を通じた成果や課題を明らかにするのが、「事後指導」です。「事後指導」では、「教育実習」での学びに関するポスターセッションやプレゼンテーションを行うことで、自らの「体験」を「経験」に昇華させていくのです。



教職実践演習

教員になるための4年間の学びの総決算とも言えるのが、4年生後期の「教職実践演習」です。「教職実践演習」では「教科系列」「教職系列」「実践系列」という3つの系列に沿って深めてきた教職の学びを通して、自らが教員として仕事をするための知識、能力、態度をどの程度身につけてきたのかを振り返っていきます。そして、もし不十分な部分がある場合には、その回復のために補足的な学びを行います。

4年間のカリキュラムで身につけることが求められるのは、次の7点です。

1. 学校における現代的な教育課題について、理論と実践の両面を関連づけながら、端的に説明できる。
2. 教育実習などの機会ですらが行った教育実践について、教科・領域の内容と方法に関する基本的知識をもとに批評し、具体的な改善案を出すことができる。
3. 教育実習などの機会ですらが行った教育実践について、情報教育機器の活用についての基本的知識をもとに批評し、具体的な改善案を出すことができる。
4. 指導教員や同僚実習生などの指導・支援を受けなくても、1単位時間の学習指導案・保育案（評価計画を含む）をひとつお作り作成し、それに基づいて実践することができる。
5. 子ども理解に関する内容について、理論と実践の両面を関連づけて端的に説明すると共に、教育実習などの実践経験にもとづき、子どもたちに効果的に対応する具体的な方法の一つ以上示すことができる。
6. 学校が組織として家庭・地域・外部諸機関と連携する具体的な内容や方法について、理論と実践の両面を関連づけながら、端的に説明できる。
7. 教師としての自覚を持ち、理論と実践の両面を関連づけながら、教職の意義や役割および職能成長の意義や方法について端的に説明できる。

自らの4年間の学びを振り返り、自らが求められている力が身につけているのかどうかを、根拠を挙げながら同級生や指導教員に示さなければなりません。根拠とは、例えば、授業科目のミニツツペーパー（毎時間の終了時に提出するミニレポート）、講義中に出された課題、期末レポート課題、テスト結果など、教員から提出することを求められた学習成果だけではなく、学校ボランティア等に赴いた際の日誌、読書記録、自主勉強会でのレジュメなど、課外に主体的に行った学習経験の成果物も積極的に用いることが望まれます。もちろん、教育実習の際の日誌、学習指導案、教材教具なども、自らの成長を示す重要な根拠になります。

「教職実践演習」では、自らがどのような教員を目指し、どのように学習計画を立て、どのようにそれを実現して力をつけてきたのかがつぶさに問われます。大学のカリキュラムにただ流されて4年間を過ごし、指導教員に言われるがままの受動的な学習してきた学生は、それなりの成果しか残すことができません。大学生は自らの成長を自らの力で切り拓いていかなければならないのです。入学当初からそのような志を持ち、努力し続けた学生は、「教職実践演習」で優れた成果を残すことができるだけでなく、即戦力を身につけた質の高い教員として、学校現場で活躍していくことができるでしょう。

奈良教育大学は、教員になりたいという強い意志を持ち、教員になるための自らの学びを自ら主体的に選択、判断、決定していこうとする学生を求めています。大学が準備しているカリキュラムは、こうした学生の成長を力強くサポートするものなのです。



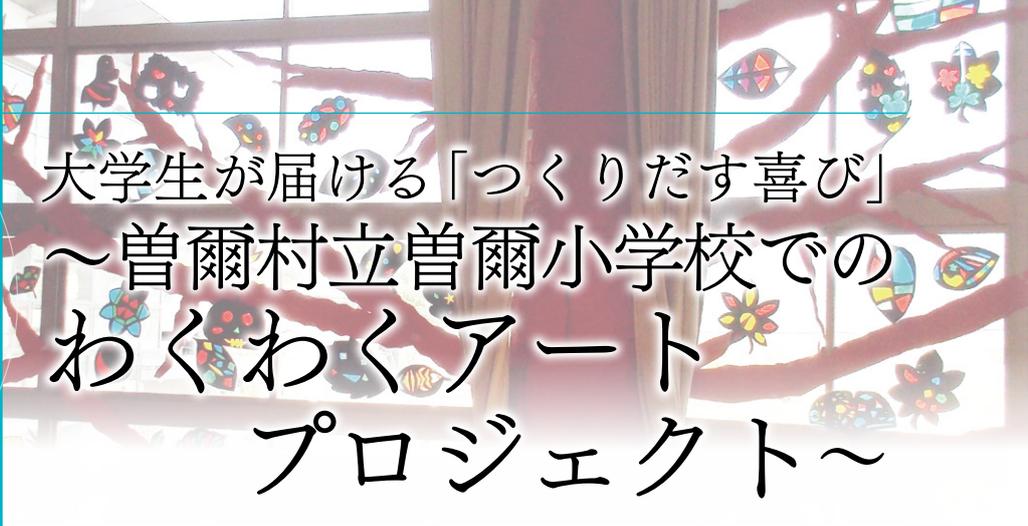
受講者の声



教育学部
学校教育教員養成課程
伝統文化教育専攻
文化遺産教育専修 4年生
すぎやま あすか
杉山 明日香さん
私立 奈良学園高等学校出身

教職実践演習では自分の達成度を評価し、その根拠を発表しました。原稿を書く際に今まで受けた授業を振り返ることができ、学んだ内容を再確認するきっかけとなりました。4年間の学びを復習した上での模擬授業はより多くの問題点を発見し、具体的な改善案も考えることができたので有意義であったと感じています。特に私にとって、授業での発問とそれに対する解答への対応方法は実践不足であると感じていたため、様々な工夫を凝らして模擬授業に挑むことができました。教職実践演習は大学での学びを集大成として発揮することができる授業であると考えています。





「わくわくアートプロジェクト」とは？

奈良教育大学フレンドシップ事業の一環として、美術教育専修の学生が中心となってわくわくアートプロジェクトに取り組んでいます。この度は奈良教育大学と奈良県曾爾村との包括連携協定に基づき、奈良県曾爾村立曾爾小学校において「きらきら光るみんなの樹をつくらう」という実践を行いました。アートプロジェクトは大学生・曾爾小学校児童の皆さん双方に目的があります。1つ目は教師を目指す大学生が実践的指導力向上のため、曾爾小学校の特色を生かした題材を研究・開発・実践することです。2つ目は曾爾小学校の皆さんに普段の授業では体験できない造形ワークショップの場や、関わることの少ない大学生という年齢層との交流によるアート体験の機会を提供する目的です。以下、具体的な実践内容を紹介しします。



(左から) 4回生 好井千秋さん、
4回生 北野有紀さん、4回生 石橋瞳さん

1. 「きらきら光るみんなの樹をつくらう」の流れ(平成27年10月24日)

	児童の活動	指導者からの教授行為、留意点等
導入	①活動内容を把握する。	カーテンの中に木の幹を隠しておいて…じゃーん！ 「今日は曾爾小学校の全員でこの大きな1つの作品を作ります！」
展開	②「葉っぱのスタンドグラス」の参考作品を見る。	「どんな葉っぱを作りましょうか？“〇〇な葉っぱ”に当てはめて考えてみましょう！」 
	③作り方を知る。 ④制作する。	<ul style="list-style-type: none"> ・多様な参考作品を用意しておく。 ・葉っぱ以外の形を作りたい児童のために、未加工の黒の画用紙を用意しておく。 ・自然に相互鑑賞が生まれるよう、班で円形になって座る。 ・班内で言語活動が活発になるよう、学生スタッフがしっかりと声掛けをしたり賞賛したりする。
	⑤ラミネート加工で仕上げる。 ⑥貼りたい位置に葉っぱを貼る。	
まとめ	⑦作品をみんなで鑑賞する。	<ul style="list-style-type: none"> ・電気を消して落ち着いてから見るようにする。 ・互いの作品を認め合い、達成感を味わえるようにする。 ・景色と一体化したスタンドグラスと床面にうつる光の美しさに気づくようにする。 



2. 葉っぱのステンドグラスの作り方



1 黒画用紙を用意する。



2 好きな模様をくり抜く。



3 カラーセロファンを貼る。



4 ラミネート加工をして完成!



3. 参加学生による当日レポート

自然豊かな場所にある曾爾小学校の児童のみなさんと「葉っぱのステンドグラス」を作りました。先生方や学生が「上手く切れたね!」「かわいいね!」等と褒める声かけをしている場面では、児童のみなさんは満足げな笑みを浮かべ、嬉しそうにしている姿が見られました。曾爾小学校の児童のみなさんと一緒に素晴らしい作品を楽しく作ることができて本当に良かったです。

曾爾小学校という、奈良市とは違う環境の中で、児童のみなさんとふれ合うことができました。児童のみなさんが様々な葉っぱの形を作っている様子に、発想力の高さや柔軟性を感じました。友だちの作品を模倣する姿も見られ、児童のみなさんは各々自らの発想力を向上させているように感じました。最後には「まだ作りたい」という感想もあり、楽しんでもらったようで嬉しかったです。



(左から) 3回生 伊吹結香さん、3回生 金本玲奈さん、3回生 小松真子さん

わくわくアートプロジェクトでは、私たち3回生と4回生の先輩方を中心に活動の計画を立てました。曾爾小学校の児童のみなさんに楽しんで活動してもらうことができるように、当日は私たち自身も楽しみながら活動しました。作品制作では児童のみなさんから出た形や色を大切にしよう心掛け、様々な声かけを通してとても充実した活動にすることができました。



4. 本学図書館での展示企画 (平成27年11月20日～12月4日)

曾爾村立曾爾小学校での造形活動終了後は、しばらく学校内で作品展示をしていただきました。その後、みんなでつくったステンドグラスを本学図書館・えほんのひろばのガラス窓や図書館エントランスのガラス面を使った展示を行いました。大学祭期間中でもあったため、本学関係者の皆さん以外に外部からもたくさんの方に見ていただくことができました。



また、ステンドグラスとともに曾爾小学校で行った学生と児童の皆さんによる活動の様子を撮影した写真パネルも展示しました。今回の展示企画を通して、わくわくアートプロジェクトのことを多くの方々に知っていただく機会になればと考えました。



5. 次年度に向けて



「わくわくアートプロジェクト」は、曾爾小学校の児童の皆さん、教職員の先生方、そして保護者の皆様に支えていただき、今年度からスタートすることができました。1日限りの造形活動でしたが、みんなで作りあげたステンドグラスの樹が、曾爾村の陽射しの中で輝いている姿を見た感動は忘れられません。次年度もこの企画をさらに実りあるものにし、造形活動を通して笑顔を共有する体験を児童のみなさんに届けたいと考えています。

先生の声

曾爾村立曾爾小学校
校長

まつおか きよゆき
松岡 清之先生



製作中の児童と学生さんとの対話や、窓に掲示された作品から、学生さんの主体的で意欲的な教材研究が、見事であったことが分かりました。私を含め参加した教員が、学び続けることの大切さを再認識する機会になりました。10年目となる理数系の「サマースクール」につづき、美術教育の皆様との「わくわくアートプロジェクト」が始まりました。母校の大学とのプロジェクトの広まり、深まりとともに、曾爾小学校児童が確実に成長してきています。本当にありがとうございます。次年度の活動が今から楽しみです。

クローズアップ

本学教員の研究を
詳しく紹介

赤ちゃんを みつめて

家庭科教育講座 准教授 なか がわ あい 中川 愛

赤ちゃんの魅力

赤ちゃんをみかけると、じっとみつめてしまうことって、ありませんか？赤ちゃんは、大人とは異なる特徴をもつことがわかっています。動物行動学者コンラート・ローレンツは、ヒトだけでなく多くの生物の赤ちゃんに共通する特徴（ベビーシエマ）を報告しています。身体に比べて大きな頭や顔の中央よりやや下に位置する大きな眼、短くて太い手足、全体に丸みのある体型などがその特徴です。このような姿の赤ちゃんをみると私たちは可愛いと感じてしまいます。

赤ちゃんの微笑みや笑顔を見る

と私たちは、嬉しい気持ちや幸せな気持ちになることもあります。最近の研究では、胎児にも微笑みがみられることがわかっています（川上・高井・川上，2012 他）。魅力的な姿や笑顔をふりまく赤ちゃんが、さらに声を出したり、指さしをしたりすると、私たちは、様々な養育行動を行いたくなりますよね。

また、赤ちゃんに触れ合ったことのある小学生に赤ちゃんの感想をきくと、『ぷにぷに・ふわふわ・もちもち・もっちり・柔らかい』といった回答がかえってきました。大人と比べて、水分量が多い赤ちゃんの肌はとても気持ちがよく、これも赤ちゃんのもつ魅力のひとつといえます。

赤ちゃんへの行動

そんな赤ちゃんを目の前にすると、私たちは大人同士とは異なる行動を示します。例えば、語りかけです。マザリーズ(Motherese)やInfant-directed speech(対乳児音声)と呼ばれる語りかけがみられます(Ferguson,1964; Snow,1977 他)。例えば、韻律的な特徴(ゆっくりしたテンポ、高いピッチ、誇張したイントネーション)や文法的簡単化(発話の長さが短い)、文法的表現(非文法表現は使わない)、冗長な表現(少数の語や節を繰り返す)などです。これらの特徴は、文化の異なる世界中の母親や父親、また親以外の人でもみられることがわかっています。

日本の養育者は、子どもに対して特別な語(育児語)を使用することもわかっています。育児語には、擬音語擬態語の使用、音韻の反復、語の般用傾向、接尾辞を付加する傾向、接頭辞を付加する傾向などがあります(早川, 1981; 村田, 1960 他)。

独特な語りかけだけでなく、私たちは、赤ちゃんに新奇なモノを提示するとき、その動作を反復したり、単純化したりします。そ



(図1)生後5か月男児



(図2)生後8か月男児





(図3) おもちゃで遊んでいる姉妹



(図4) 泣いている弟をみつめる兄

きょうだい間の遊び

私はこれまで、大学生や高校生、小学生が赤ちゃんとのようにかかっているのかを研究してきました(中川・松村, 2004; 2006; 2007; 2010)。その中でわかってきたことの1つは、これまで赤ちゃんとかかわったことがない人は、赤ちゃんに向けて、ほとんど発話を行わないということでした。どうしたらいいのかわからない。何を話したらいいのかわからない。赤ちゃんが好きでかかわりたいと思ってもその方法がわからず躊躇してしまう姿をみてきました。また、保育士を目指す学生へのアンケート調査の中でも赤ちゃんへのかかわり方に不安を感じている学生が多いこともわかりました(中川, 2010)。

これまでの研究は母親など養育者を対象としたものが多く、きょうだいを対象とした研究は多くはないことから、次に、きょうだい間の様子を観察することにしました。乳児と年齢が近く、毎日一緒に過ごしているきょうだいの遊び方は、赤ちゃんへのかかわり方に不安をかかえる人のヒントになるかもしれないと考えました。まだ、数例の事例ではありますが、年上きょうだいは、ことばを話せない乳児きょうだいに対して、名前を呼んだり、発話と行動を伴ったやりとりを行っていることがわかりました(中川, 2012 他)。その中には、乳児の動作や自分自身の動作に擬音語擬態語をつけるだけで遊びが成立していることもありました。例えば、ボールを転がしながら「コロ」「コロコロコロー」と言うなど、声のトーンを変えなが

れは、Motionese (Brand et al., 2002) やマルチモーダルマザリーズ (Gogate et al., 2000) と呼ばれています。

このように、大人は赤ちゃんとかかわる際、言葉とジェスチャーとを同期させることが多く、新しい言葉と意味の関係を際立たせるようにしています。これらの特徴が、赤ちゃんの注意をひきつけます。また、養育者が、事物や行為、事物の特徴にラベリングづけをおこなうことで、子どものことばの獲得を促進していくと考えられています。

また、生まれて間もない赤ちゃんの視力はほとんどみえていないことがわかっています。しかし、聴覚は、妊娠7か月頃には完成し、胎児期から母親の心臓や腸の音、母親の声や外の環境音を聞いていることがわかっています。そのため、幼い子どもは、視覚情報よりも聴覚情報に敏感であると考えられています。

3歳児と1歳児の子どもをもつお母さんと会話した時のエピソードです。

弟の世話や家事に追われるお母さん。お兄ちゃんは、お母さんの

注意を引くために、一人でできることをやらなかったり、ぐずぐず言ったりするそうです。ついお母さんも「早くしなさい」「一人でできでしょ」と強く言ってしまう。声のトーンは低く、怖い声。そんな時、お兄ちゃんは、「お母さんキライ」とすねてぐずぐず。最後には泣いてしまうそうです。そんな様子を見て、お母さんはさらにいらいらしてしまうといいます。お母さんに、マザリーズや育児語のお話をしました。すると後日、そのお母さんから連絡がありました。『同じ内容でも、声のトーンや間を変えて言うと、子どもの反応が違いました。いつもは険悪な雰囲気になるのに、笑いが起こって、いらいらしませんでした。』とのことでした。幼い子どもとかかわる際に、声調に注目することは、やはり効果がありそうです。マザリーズは、赤ちゃん楽しい快の状態を共有している時にみられる語りかけです。マザリーズを発声している時、私たちは自然と笑顔になっています。また赤ちゃんも笑顔です。先ほどのお母さんも声のトーンや間を変えることで、笑顔がうまれ、笑いが起きたのかもしれない。



ら、何度も繰り返し遊んでいました。乳児きょうだいも笑い声をあげたり、手を動かしたり、とても喜んでいる様子が観察されました。動作に言葉（擬音語擬態語）をつけると自然と声に抑揚がつきますよね。表情もやさしくなります。これは、先ほどお話したマザリーズの特徴に似ていますよね。

かかわり方が不安な人は、赤ちゃんとかかわる際、何か特別なことをしなければと意識しすぎているのかもしれませんが。ぜひ参考にしてみてください。

今後について

最近気づいたことですが、私は赤ちゃんが好きだけでなく、赤ちゃんの存在自体に憧れていたようです。

他者に依存しないと生きていけない赤ちゃん。大人は、自然と赤ちゃんの魅力に引きつけられ、さまざまな養育行動を行っています。赤ちゃんはあくまでも自然体です。お腹がすいた時、泣きたい時に泣き、楽しい時、嬉しい時に笑う。感情のままに、自然体で



(図5) 2歳7か月児の作品

いるだけで、その魅力が十分他者に伝わっていて、愛されています。

そんな赤ちゃんをみていると、私ももっと心から湧き出る声（感情）を素直に受け取り、その感情を感じ切って毎日過ごそう! と思ったりもします。

子どもがどんなことを考えているのか。どうやって表現しているのか。どうやって楽しさを共有しているのか。今後も子どもをみつめていきたいと思っています。

学生のみなさんには、子どもを

みる視野を広げて欲しいと思っています。いろいろなものさしで、子どもをみつめると、新しい発見があってワクワクしますよ!

図5の写真は、2歳7か月頃の子供がブロックで作ってくれた作品です。さて、これは何にみえますか?この子の気持ちになって考えてみてください。

ヒント:この作品は梅雨の時期に作ってくれました。



プロフィール

家庭科教育講座

なか がわ あい
准教授 中川 愛

専門は、保育学（対乳児行動に関する研究）。

兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科博士課程修了（2010）博士（学校教育学）。

湊川短期大学講師、准教授を経て、2010年より現職。





ラボ・レター

— 学生による研究室紹介 —

学校教育教員養成課程 教科教育専攻
数学教育専修

数学教育学

ふなはし ゆか
舟橋 友香研究室



教育学部 学校教育教員養成課程
教科教育専攻 数学教育専修
4回生

かわぐち ようすけ
川口 洋介さん

大阪府立交野高等学校出身



From

舟橋研究室の紹介

数学教育専修には、代数学、解析学、幾何学、応用数学、確率論・統計学、数学科教育のそれぞれの専門の研究室があります。2回生の末に所属する研究室が決まり、3回生から研究室ごとでゼミを行います。

私が所属する舟橋研究室は、数学科教育を専門としています。数学科教育は、代数学、解析学などの専門的な数学を学ぶ分野とは少し違い、主に算数・数学が子どもにどのように作用するのかを考える分野です。例えば、子どもの思考の分析を活かした指導方法の改善や提案に関する研究、問題を通して子どもにどのような力が身に付くかに関する研究などを行っています。

舟橋先生は、ゼミの場では「1人の研究者」として私たち学生に対して厳しくご指導を与えてくれますが、研究に悩んだときには「学生を育てる1人の教員」として親身になって助言を与えてくれます。そしてどんなときも優しさがあり、その優しさが時には「お母さん」のように感じることもありました。

ゼミでは、基本的に希望する研究テーマを自分で選択することができ、テーマに沿って調べてきたものを発表します。そして、発表に対しての意見や指摘、アドバイスなどをいただきます。舟橋研究室のゼミは、3、4回生合同で行われているので、様々な観点からの意見が飛び交い、多くのことを学ぶことができます。舟橋先生からは、研究についてのご指摘以外にも、最近の教育内容に関する話題を紹介していただき、それについて皆で考えたり、意見を交換したりしています。先輩後輩関係なく、研究をする立場から様々な意見を交換し合い、教育について深く学び合える研究室となっています。

卒業論文テーマとその要旨

方程式の文章問題における立式の困難点の特定とその解消方法

Student's Voice



教育学部
学校教育教員養成課程
教科教育専攻
数学教育専修 4回生
まつもと なおし
松本 淳志さん
大阪府立八尾高等学校出身

私の研究では、全国学力学習状況調査における生徒の方程式の文章問題における立式の困難点に関する理論的考察、及び質問紙調査、インタビュー調査において生徒の立式における思考過程を調査し、生徒が立式の困難点を解決するために有効な指導方法を提案することを目的としました。

まず、方程式の文章問題における立式の困難点を解決するための思考は、四つに分かれることがわかりました。一つ目は「数量の関係の整理という思考で、問題文の数字を整理したり、求めるものは何かを整理すること」、二つ目は「表現方法の転換」という思考で問題文の数量や状況を整理する際に、絵、表、図を用いること、三つ目は「具体的なシチュエーションの想起という思考で、問題文の内容や計算がわからない時に、具体的な場面や数字をイメージすること」、そして、四つ目は「方程式モデルの選択という思考で、整理した内容をもとにどの方程式で立式するかを選択すること」です。この四つの思考を大切にすることが重要であると考えます。

次に、質問紙調査やインタビュー調査を行うことで、生徒は四つの思考の中でも、表現方法の転換の思考を活動と立式との関係が理解できず、立式できていないことが明らかになりました。そこで、この結果に関連する教科書の記載部分の分析を行うと、教科書における指導方法が各社で異なっていることがわかりました。これらの結果から、表と式との関係性を指導するということを連立方程式の活用において統一することで、より生徒の立式の困難点を解決できると考えました。その上で、方程式の文章問題を解くための四つのポイントを含んだワークシートを作成し提案しました。



「今に生きる言葉」

私は現在、桜井市立桜井西中学校に勤務しています。本校は万葉のふるさと桜井市の西部に位置し、東に三輪山、南西には大和三山を望むことができる豊かな自然に恵まれた環境にあります。そんな素敵な環境の中で育った子どもたちは、とても元気で、よく笑い、よく遊び、よく学びます。教員となって2年目を迎えた私ですが、毎日いろいろなことと出会い、ふれあい、めまぐるしく成長する子どもたち、そして頼もしい諸先輩方に支えていただきながら、楽しく充実した日々を過ごしています。

私は在学時代、教職大学院に所属していました。教育学部出身ではない私にとって、大学院での学びは新鮮そのものでした。学習指導要領を熟読したり、教材教具の開発の方法を知ったり、学校を創ってカリキュラムを考えたり、保護者会を開いてみたりと刺激にあふれた毎日。基礎基本をしっかり学んだことが、1年目にとても役に立ち、また私の強みになりました。

楽しい教師生活を送る中で、ふと悩んだり、考えたりする時に振り返るものがあります。それは大学院での講義や教育実践、ESD 連続公開講座などをまとめた一冊のノートです。このノートは悩んでいる時はヒントになり、また仲間の面影を感じて前を向ける大切なものです。口から出た言葉や耳から聞いた言葉はほとんど忘れてしまいますが、ノートに書き留めることによって言葉は今も私の中で生きています。

例えば ESD 連続公開講座の中で出会った「あたり前のことは、あたり前でない」という言葉。あたり前に過ぎていく日々の中で、少し立ち止まり、風の音に耳を澄ませたり、山の青さに目を向けてたりすることは、時としてなおざりになっていると思います。自然の中に私たちの生活もあることを意識すると、少し心に余裕ができるような気がします。余裕の生まれた心で、自分自身の生活の中に自然の変化を意識することができれば、生活している地域の特色や、その土地の文化をより深く知るきっかけになるかもしれません。知るということは、その土地の文化を守ることにつながります。子どもたちに自分の地域を、自分を好きな人間に育ててほしいと思う私にとってとても大切な言葉の一つです。

みなさんが子どもたちにどんな人間になってほしいか、その為に何をすればいいか、考えるヒントはまさにこれまでの生き方、学生時代の経験や出会った言葉です。みなさんも在学中に学んだ知識・経験を大切にしてください。また、私の大学院生活は仲間と共にありました。楽しい時間を共有できる友であり、教職を目指すライバルでもありました。私が充実した生活を送れたのは仲間のお陰です。肩を並べている朋を大切にしてください。



授業中の様子



ユネスコクラブでの活動の様子



ユネスコクラブでの活動の様子



在学中の発表の様子



奈教のひみつ

学生広報スタッフ
“なつきよん's CLUB”
企画



授業紹介～留学生と国内学生がともに学ぶ 異文化理解研究・現代日本論～

(担当:岩坂 泰子(英語教育講座・特任講師)・和泉元 千春(国際交流留学センター・准教授))

本学では、教養科目から専門科目まで数多くの授業が開講されています。
その中から今回は、留学生と国内学生の合同授業の様子を紹介します。

授業の流れ

第1部

STEP1(第1～2回)

異文化と出会う

他者紹介や異文化体験の語りを通して自分にとっての「他者」との出会いを体験します。



STEP2(第3～4回)

言語のバリエーションと 社会性の関係を考える

アナと雪の女王「生まれてはじめて」方言バージョンを聞き比べたり、自分のことば(母語)でしか表現できないことについて共有しながら、一つの言語内の変種の社会的なイメージの理由やことばとアイデンティティの関係を考えます。



STEP3(第5～6回)

文化を再定義する

「国」という静的な概念でとらえがちな「文化」を「個の文化」として再定義します。なじみのない食べ物に対するイメージや性同一性障害児童の事例をとりあげ、文化って何?を考えます。



STEP4(第7～8回)

他者理解における違和感を 客観的に捉える

留学生と国内学生の初対面の会話、精神障害施設での初対面の会話を取り上げ、「異なる文化」「異なる他者」と交わる中で造り上げられる他者と自己のイメージを会話分析の手法を用いて分析的に理解します。



どんな授業?

この授業は、教育学部英語教育専修専門科目「異文化理解研究」と留学生科目「現代日本論」の合同開講授業です。留学生と国内学生。共に同じキャンパスにいて、お互いにどんなことを考えているのか…気になりながらなかなか踏み込んだ対話ができずにいた学生たちに、授業という保証された枠の中で安心して他者を理解し、自分の中にある内なる壁と向き合ってほしい、そんな願いから生まれた授業です。文化の 카테고리を国家の単位に限定せず、同じ国の中にも人種、宗教、出身地域、ジェンダー、障害などの差異による多様な文化があることに気づくことによって、履修生はそれぞれに自分自身の文化、あるいはアイデンティティを考えるきっかけを得ていきました。第1部(第1回~第8回)では、国内学生と留学生が段階的に異文化体験を共有したのち、第2部(第9回~)では国内学生と留学生が混合でプロジェクトワークを行い、自己と他者、そして多様な文化を理解することについて考えました。



受講生の声



教育学部 学校教育教員養成課程
教科教育専攻 英語教育専修 2回生
平田 甲矢乃さん
神戸市立葺合高等学校 国際科出身

インドネシアをはじめ、ロシア、中国など様々な国からの留学生さんと、異文化間の理解について考える授業であったと思います。この授業のおかげで新しい価値観をもつ事ができました。まず、異文化理解とは必ずしも国と国の違いに限らず、違う考えをもつ場合の相互理解と同じであること。次に、文化や言語が違って共感し合う事が出来るということ。そして、留学生さんたちはとてもモチベーションが高く尊敬できるということです。私は高校で国際科という学科にいたので、日頃から異文化理解は大事と言われてきました。しかし、それはこの授業でたくさんの外国籍の友達ができ、初めて体感できたことでした。みなさんも温かい雰囲気の中で価値観を広げてみませんか?



第2部



グループワーク(第9~12回)~発表(第13~14回) ~まとめのふりかえり(第15回)

第1部で耕した異文化コンフリクトに関するテーマを グループの協働作業によって深める

自由に選択した調査テーマについて、各グループで手分けして学内外の人にアンケートやインタビューに出かけて理解を深めていきました。時にお互いにごつかりながら自ら行動を起こそうとする態度が多くのグループに見られました。一例ですが、国内学生と韓国留学生のグループは、日韓の互いのイメージを公的な見解の調査と自分たちの身内の人へのインタビュー調査によって整理し、両国の埋まらない溝に対する戸惑いを示しながらも自分たちがどうすべきかについて話し合いました。またインドネシアからの留学生と国内学生グループはイスラームに対する学内のイメージについての調査を行い、自らの行動を変化させる様子も観察されました。



受講生の声



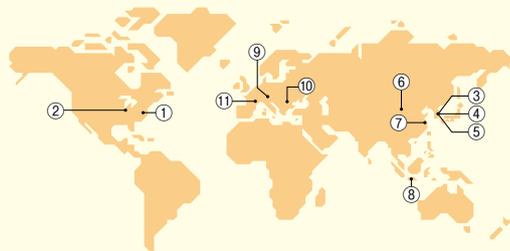
教育学部
学校教育教員養成課程
教育発達専攻
特別支援教育専修 1回生
康 希地さん
IncheonChoeun High School
出身

私が「現代日本論」という授業で一番印象に残った事は最後のグループワークです。私達のグループが選んだテーマは「日韓問題について」でした。それは、日本人も韓国人もあまり触れたくない問題でした。しかし、触れたくない分だけこの問題について具体的に知っている人は私達を含め、あまりいませんでした。

私達は韓国で最も注目されている「竹島、独島(トクト)問題」を中心に何年も続いている日本と韓国の対立の理由を調べました。また、韓国人と日本人、それぞれにこの問題についてどう思っていて、どのくらい知っているのかをインタビューしました。この活動で私が思ったのは、人と人、国と国がより良い関係を築いて行くには、まずお互いのことを知り理解し合う事が大切だということです。この授業では偏見を持たず自分と違うものに触れてみる機会と、そういう事について改めて考えることができました。



留学生 レポート



- ① ロックヘイブン大学
- ② セントラルミシガン大学
- ③ 嶺南大学校
- ④ 公州大学校
- ⑤ 光州教育大学校
- ⑥ 西安外国語大学
- ⑦ 華東師範大学
- ⑧ インドネシア教育大学
- ⑨ ハイデルベルク大学
- ⑩ フカレスト大学
- ⑪ リヨン第三大学

Interviewee



教育学部 学校教育教員養成課程
教育発達専攻 幼年教育専修 3回生
長野県立松本深志高等学校出身

かみじょう さえこ
上條 沙恵子さん
リヨン第三大学 (フランス)
(留学期間 2015.9 ~ 2016.5)



フランスで本格的なハロウィンを体験!



留学したばかりのころ、現代美術館にて

⊕ 留学しようと思ったきっかけ

第2外国語でフランス語を選択し、フランス語の発音の心地よさに魅了されました。2回生の冬、新しいことが経験できる場所に行きたいという思いが強くなり留学を決めました。

⊕ 留学する前にどれくらい語学の勉強をしたか

留学する上での仏語能力条件があったので、試験のための勉強が多かったと思います。

⊕ 留学先での一日

勉強はもちろん、空手やフィットネスをしたり、友達と新しいレストランを探しながら街を歩き、食事をしたりしました。リヨンの街は歴史もあり、一人で散歩もよくなりましたね。

⊕ 一番驚いたこと

日本漫画、アニメが非常に普及していることです。Manga 専門店もあります。日本の漫画についての話題が街中で聞かえるとちょっと嬉しかったですね。

⊕ 一番楽しかったこと

フランスのクリスマス、フランス人の家で過ごせたことです。食べて歌って踊って、大人も子どものようでした。フランスが素敵な国であることを改めて実感した時間でした。

⊕ 一番つらかったこと

フランス語がなかなか聞き取れなかったことです。日本でもっと鍛えておけばよかったと本当に後悔しました。

⊕ 留学経験をどのように生かしたいか

フランスの良さを知るとともに、日本という国の良さも実感しました。日本の外に出て生活したからこそ感じられたことだったと思います。日本という国をもっと海外に向けて発信したいと感じました。

⊕ 一言

後悔のなく終わる留学などほぼあり得ません。だからこそ色々なことに挑戦するべきだと思います。留学生活は自分の行動でいくらかでも変えることができます。留学される方は積極性をもってたくさん勉強して思い切り楽しんでください。



フランスのクリスマスは本当に華やかで温かみがありました





リヨン第三大学 (フランス)

本学の国際交流協定校の一つであるリヨン第三大学 (2004年3月交流協定締結) は、フランス第2の都市リヨンにあります。リヨンは歴史ある古い町で、歴史的建造物が多く残っています。また美術館や博物館、劇場が多くあり、有名なオペラを手軽な値段で観る

ことができる所もあるなど、芸術好きな人にはぴったりの町です。

今回は、本学からリヨン第三大学に留学している上條 沙恵子さんとリヨン第三大学から本学に留学しているEmilie Corineさんと Jonas Maximeさんに話を聞きました。



近江八幡への学習旅行

Interviewee



リヨン第三大学 (フランス)

左: CHAROY Emilie Corine さん

右: ANDREYS Jonas Maxime さん

日本 / 奈良教育大学
(留学期間 2015.10 ~ 2016.8)

⊕ 留学をしようと思ったきっかけは。

- ・「日本にいつか絶対に行く！」それは12歳のときから、僕の夢でした。僕が日本を初めて見付けたのは12歳のときでした。一目惚れといえるかもしれませんね(笑)。(ジョナス)
- ・子どものときから日本に興味があったので高校を卒業した後で大学で詳しく勉強するつもりでした。(エミリー)

⊕ 留学する前にどのくらい日本語を勉強していましたか。

- ・中中で日本語の勉強を始めました。そのとき学生は私一人でした。その後リヨン第三大学で勉強して、全部で8年くらいです。(ジョナス)
- ・大学で始めて2年間です。頑張ります!(エミリー)

⊕ 奈良教育大学の学生としてどのように過ごしていますか。

- ・毎日、漫画とライトノベルと時々竹取物語を読んでいます。日本文化で最も興味あるのは古代文学ですので、絶対に古事記や平家物語や古今集も買って帰ります!それに少林寺拳法部にも入ったんです。部員達はやさしいし、少林寺拳法は面白くて楽しいですよ。(ジョナス)

・私の専門は歴史と社会と音楽ですから、日本語の授業は時々大変ですが、生活はとっても楽しいです。奈良で心理学の勉強もしたいです。(エミリー)



神戸の海、未来希望が見えるかな

⊕ 留学生活で一番驚いたことは何ですか。

- ・町の建物のスタイルです。フランスの町では建物のスタイルは統一されています。しかし、日本はそうではないので少しカオスみたいですね。(ジョナス)
- ・国で日本文化について調べたので驚いたことがほとんどありません。日本はとても安全な国だし、どこでも説明がすごく分かりやすいし、皆が優しいし安心しました。いっぱい安いものがあるけど果物と野菜はちょっと高すぎます。(エミリー)



ゲームで勝ったぬいぐるみと運がいい僕

⊕ 留学中一番うれしかったことは何ですか。

- ・日本人に出会うだけでなく、世界中から来たほかの留学生に会えることもとてもうれしいです。(エミリー・ジョナス)

⊕ 留学体験をどのように生かしていきたいと思えますか。

- ・フランスに帰ったら、奈良で学んだ古典文学や古語の知識を生かしたいです。(ジョナス)
- ・将来は日仏交流を深める手伝いをしたいです。この留学は勉強のためだけでなく、自分自身の成長にも役に立つでしょう。(エミリー)

⊕ 日本の大学生、高校生の方々に一言。

- ・皆さん、奈教大の少林寺拳法部に来てね。(ジョナス)
- ・みなさん、留学したかったらぜひリヨンに来てください。フランス語は難しいと思われていますが、大丈夫ですよ。(ジョナス・エミリー)



キラリ 奈教生



Profile*
プロフィール



教育学部
学校教育教員養成課程
教科教育専攻 保健体育専修
3回生
ちばあやの
千葉文乃さん
私立須磨学園高等学校
出身



近畿地区国立大学体育大会「剣道の部（個人戦）」で 第2位に入賞した千葉文乃さん

近畿地区国立大学体育大会（以下、近国体）は近畿地方にある加盟 11 国立大学が参加する 17 種目の体育大会で、今年度で 53 回目の開催となった歴史ある大会です。

今回は近国体で活躍した剣道部の千葉文乃さんにお話を伺いました。

剣道を始めたきっかけは？

私が剣道を始めたのは、小学 2 年生の時です。当時、とても仲の良かった友達が剣道を始めたので、母親があなたもやってみたらどうか、と見学に連れて行ってくれたのがきっかけでした。正直、初めの方は嫌がりながら稽古に行っていました。続けるうちに剣道の面白さや、何かを頑張ることの大切さに気付き、中学校でも剣道部に入部しました。中学、高校と剣道漬けの生活を送り、現在は奈良教育大の剣道部で週 3 日、2 時間半程度の稽古に他の部員たちとともに励んでいます。稽古時間や稽古量はあまり多くはありませんが、その分考え、工夫しながら、集中して稽古に取り組むことで、今まで培ってきたものをさらに伸ばすことができたように思います。昨年度は部の主将も務めさせていただきました。チームを引っ張っていくことの難しさを感じましたが、周りの方々の支えもあり、最後までその役割を全うすることができ、とても良い経験になりました。

当日の様子を教えてください

近国体では、優勝を目指すために、一つ一つの試合を着実に勝ち抜こうと思って試合に臨みました。試合では適度な緊張感を感じつつ、自分の力を発揮できたと思います。手ごわい相手も多く、延長戦（時間内に試合が決まらない場合、時間無制限で先に一本とった方が勝ちになります。）に持ち込むことも何度かありました。体力的にしんどい場面もありましたが、集中力を切らさないようにして、相手の隙を見逃さないように打ち込んでいきました。決勝戦では相手の勢いに押し負け、面を決められて敗れてしまいました。とても悔しかったです。準優勝できて嬉しい気持ちもありましたが、最後に負けてしまったということは、まだまだ自分に足りないところがあ

るということで、この悔しさをばねに、再び、日々の稽古を頑張っていこうという気持ちになりました。

どんな先生になりたいですか？

私は小学校の教員を目指しているので将来、剣道部の顧問を持つ機会はないかもしれませんが、仕事の傍ら、地元の道場で、小、中学生の子どもたちに剣道の指導ができれば良いと考えています。自分自身の稽古にも励み、大学卒業後もさらに上を目指していきたいと思います。また、教育現場で剣道そのものを教える機会はなくとも、剣道を続けてきた中で学んできた、剣道の礼節を尊ぶ姿勢や相手を思いやる精神、自分に打ち勝つ心などを子どもたちに伝えていきたいです。



近国体後の剣道部集合写真



ブカツ魂!

奈良教育大学には、文化会所属11団体、体育会所属26団体のクラブがあり、多くの学生が仲間とともに活動しています。ここでは、そんな課外活動を紹介します。今回は、弓道部です。

文化会

- ギターマンドリンクラブ
- 書芸部
- ウインドアンサンブル
- 地歌箏曲部
- 軽音楽部
- 現代視聴覚文化研究会
- 茶道部
- 奈響ネブ(アカペラ部)
- 合唱団コルグレイス
- 劇団キラキラ座
- (障がい者問題研究会) すぎのこ

体育会

- 合気道部
- 弓道部
- 剣道部
- 男子硬式テニス部
- 女子硬式テニス部
- 硬式野球部
- 男子サッカー部
- 女子サッカー部
- 準硬式野球部
- 少林寺拳法部
- 水泳部
- 創作ダンス部
- 男女ソフトテニス部
- 男子ソフトボール部
- 卓球部
- 男子バスケットボール部
- 女子バスケットボール部
- バドミントン部
- 男子バレーボール部
- 女子バレーボール部
- 男子ハンドボール部
- 女子ハンドボール部
- ラグビー部
- ワンダーフォーゲル部
- 陸上競技部
- 柔道部

[学生団体・クラブ紹介] http://www.nara-edu.ac.jp/campus_life/extracurricular/extracurricular_education/

pick up

弓道部

部員数14名

現在1回生が6人、2回生が7人、留学生1人の14人で活動しています。昨年主な戦歴としては、インカレで個人10位に戸取祐美が入賞し、第33回奈良女子弓道大会では団体優勝に加え、個人3位に2回生の太田あすかが入賞しました。また、第53回近畿地区国立大学体育大会では男子団体3位、女子団体2位と男女ともに入賞することができました。このように、男女仲良く日々切磋琢磨し楽しく練習に励んでいます!



第53回近畿地区国立大学体育大会

弓道部です!



教育学部 学校教育教員養成課程
教科教育専攻 国語教育専修 2回生
私立広島城北高校出身

弓道部 主将
かわもと まさひこ
河本 真彦 さん

こんにちは、奈良教育大学体育会弓道部です。

私たち弓道部は現在1回生6人、2回生7人、留学生1人の計14人で日々稽古に励んでいます。

練習は月曜日、水曜日、土曜日の週3日、土曜日には外部から師範をお呼びして、指導を受けています。

私たち弓道部は大学から弓道を始めた初心者が大半ですが、男子はリーグ戦の3部、女子は4部で活動し、女子は昨年のインカレで団体戦ベスト16、個人戦では大学から弓道を始めた2回生の戸取祐美が10位入賞などの成績を残しています。また、留学生が入部して国際色豊かとい

う特徴もあります。毎年何名か入部し、様々な文化に触れることができます。

今後の活動としては、男女ともにリーグの昇格や学生選手権大会等で昨年よりよい成績を残すという目標を掲げ、日々の練習を真剣に取り組んでいます。

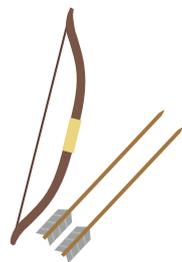
また、「弓道かっこいいなあ」「弓道やってみたいなあ」と気になっている方はお気軽に生協裏の道場へお越しください!



合宿中



2015年度 納射会



活躍する奈教生

文化系

もりかわ ゆきえ
森川 幸恵さん(大学院2回生)

- ◆ 第62回日本学書展
「文部科学大臣賞(高等学校生徒・大学生 仮名・漢字仮名交じりの部)」「奈良県・奈良市・奈良県教育委員会・奈良市教育委員会」
- ◆ 第20回全日本高校・大学生書道展「書道展賞(かな部)」
【(社)日本書芸院・読売新聞社】

おおい えりな
大井 英梨奈さん(書道教育4回生)

- ◆ 第20回全日本高校・大学生書道展「書道展大賞(かな部)」
- ◆ 「書道展賞(調和体部)」【(社)日本書芸院・読売新聞社】

きむら まさし
木村 佳史さん(書道教育4回生)

- ◆ 第20回全日本高校・大学生書道展「書道展大賞(篆刻部)」
【(社)日本書芸院・読売新聞社】

文化系

しだ やよい
志田 弥生さん(書道教育3回生)

- ◆ 第20回全日本高校・大学生書道展「書道展大賞(かな部)」
- ◆ 「書道展賞(篆刻部)」【(社)日本書芸院・読売新聞社】

ともた まいこ
友田 麻衣子さん(大学院1回生)

- ◆ 第18回「長江杯」国際音楽コンクール ピアノ部門・一般の部「第2位」
【中国音楽理事会】

体育系

かご みさき
加後 美咲さん(保健体育2回生)

- ◆ 2015アジアトライアスロン選手権にU23日本代表選手として出場
- ◆ 第17回日本ジュニアトライアスロン選手権 U19選手権女子「第3位」



11月25日～27日



呼びかけを行う参加者

自転車マナーアップキャンペーンを実施しました

11月25日から27日の3日間、本学学生・教職員、奈良県警、近隣住民が連携し、自転車マナーアップキャンペーンを実施しました。

通学者が多い時間帯である朝の授業開始前に、大学周辺で学生の通行の多い地点に立ち、登校してきた学生に対し呼びかけを行いました。

両耳で音楽を聴きながら走行してくる者や通行区分を守っていない者等に対しては、こ

れらの行為は道路交通法違反であり、違反者講習の対象にもなることを伝える等の指導を行いました。

参加した学生からは、「自転車も車両であることを改めて認識しました。自分がけがをずる場合だけでなく、歩行者等にけがを負わせないように安全運転に努めていきたい。」といった声が聞かれました。

11月28日



留学生と国内学生が本学附属小学校「言語・文化」の活動に参加しました

11月28日に「日本語コミュニケーション」と「小学校外国語活動」の受講学生が、附属小学校の「言語・文化」の活動に参加しました。

附属小学校には母語と他言語、自文化と他文化について理解を深める「言語・文化」という独自の活動があり、2013年から、文化の多様性に触れることを目的に、5年生の活動で様々な国から来た本学の留学生が文化紹介を行っています。国紹介の準備にあたっては「小学校外国語活動」の受講生が全面的にサポートしました。今年は保護者の方々も参観される中での活動となり、留学生たちは少し緊張気味に準備の成果を披露しました。

また活動後半には、みんなで一緒に日本語のことばのルールを見つけるアクティビティ

を行いました。「温泉たまご」と「たまご温泉」。全員で絵を描いて、2つの言葉から見えてくる日本語のルールを探しました。子どもたちの質問に答えられないなど問題があったときにも国内学生たちがしっかりサポートし、40分間の活動はあっという間に無事に終了しました。子どもたちや父兄からも「いい活動だった」とお褒めの言葉をいただき、準備の活動を含めて、附属小児童、本学学生（留学生、国内学生）にとって有意義な学びの機会となりました。



12月8日



談笑する加藤学長と学生

学長と学生との交流イベント「学長と話をしよう」を開催しました

12月8日に学長と学生の交流イベント「学長と話をしよう」を開催しました。このイベントは、日頃接する機会の少ない学長と学生が直に意見を交わし、学長が学生の生の声を聞いて大学運営に生かすことや、学生に学長を身近に感じてもらうことを目的として開催しているもので、今回はギターマンドリンクラブに所属する学生9名が参加しました。

加藤学長の「大学に対して希望することがあれば、この機会に何でも教えてください。」という発言に対して学生からは、「図書館を日

曜日にも開館してほしい。」「カフェがあったらうれしい。」等といった希望が聞かれました。

学長からは「学生たちの力で大学を盛り上げていってほしい。特に音楽系クラブのみなさんには、公式な大学行事や大学説明会等の場で演奏したりして、大学の顔となって活躍していってほしい。」「学生のみなさんには、若いうちに多くの場所に出かけ、たくさんの方にチャレンジしてほしい。」といったメッセージがあり、学生たちは熱心に学長の声に耳を傾けていました。

12月16日



上) 協力してもちつき
下) もちを形にするのは難しい

国際交流イベント「もちつき大会」を開催しました

12月16日、自然環境教育センター奈良実習園にて国際交流イベント「もちつき大会」を開催しました。

大学で共に学ぶ留学生と日本人学生に出会いと交流するきっかけ作りしてもらおうと毎月実施しているイベントの一つで、今回は冬の恒例「もちつき大会」を開催し、日本人学生と留学生11名が参加しました。

最初に辻野亮准教授による日本の米作りの流れについて講義を受けたあと、奈良実習園

にて収穫されたもち米を使用して実際にもちつきを体験しました。日本人学生も含め、全員もちつきは初めてで、多くの学生が初めて持つ杵の重さに驚き、慣れない様子でもちをついていましたが、終わる頃には熟練した様子の学生もいました。

ついたもちは、その場で小さく丸めて、きな粉や醤油を付けて食べました。学生は、つくたてのもちの柔らかさに感動した様子でした。



附属幼稚園 11月下旬～12月

葉っぱでいっぱい遊んだよ

附属幼稚園の子どもたちは、自然の中で遊ぶのが大好き。子どもの手にかかる、どんぐりも松ぼっくりも木の枝も石ころも草もすべて素敵な宝物になります。紅葉の秋が終わり冬が近づくと、幼稚園の中は落ち葉でいっぱいになります。そんな落ち葉も子どもたちの大切な教材です。1枚1枚拾って大切に保育室に飾ったり、葉っぱをつなげて

作品にしたりします。葉っぱをいろいろな物に見立てて、お皿にしたり、ごちそうにしたり、切符にしたりと、葉っぱ1枚にも気持ちを寄せて使います。たくさん集めたら、葉っぱのベッドに寝たり、葉っぱの雪を降らせたり、葉っぱのプールに潜ったりとダイナミックに体全体を使って遊ぶことができます。自然の中で子どもたちの感性が輝くひとときです。



附属小学校 11月21日

第42回教育研究会／“子どものため”の本質を問う授業づくり

「グローバル人材の育成」「英語・道徳の教科化」「ICTの活用」…。めまぐるしく変化する社会において、今、教育現場に様々な役割が求められています。その中で、何をめざして実践することが本当に“子どものため”になるのでしょうか。附属小学校は、子どもを成長・発達の主体者であると捉え、その権利を守り発展させる授業づくりをめざすことが子どものためである、と考えています。一つひとつの授業の中で出会わせる教材が子どもたちをなにかまともにも成

長・発達させるものであるかどうか、このことを追究しています。11月21日には第42回教育研究会をひらき、午前中には23の授業公開と9つの分科会を、また午後は基調報告（菱井教諭）と藤原和好氏（三重大学名誉教授）の記念講演『なぜ文学教育が必要かー他者と出会わせる』をそれぞれおこないました。他校の先生方や学生さん、院生さんなど、300人以上が集いました。



附属中学校 12月23日～27日

韓国公州（コンジュ）大学校附設中学校訪問



韓国公州大学校附設中学校との交流は、今年で四年目を迎えます。訪問したのは、2年生6名と引率教員3名でした。毎年、夏に実施していましたが、今年度はマーズの流行により、クリスマスシーズンの冬季休業中、12月23日より27日までの4泊5日で訪問することになりました。

今回、附設中学校を訪れた日は、普通の授業ではなく、特別に「文化祭」のような行事を企画していただきました。生徒たちの作品展示や韓国古来の伝統的な遊びの体験、チヂミなどの軽食コーナーなど、様々なブースが準備されており、コンジュの生徒や先生たちと一緒に多くの体験ができ、大変楽しいひとときを過ごすことができました。附設中学校での歓迎会では、本校代表生徒6名による奈良や学校、そして自分

たちの紹介を兼ねたクイズ大会は大いに盛り上がり、大変好評を博しました。

滞在初日は、昨年と同様、朝鮮時代の農村を復元した韓屋村（ハノク・マウル）に宿泊し、2日目と3日目は生徒それぞれの交流パートナー宅にホームステイさせていただきました。公州（コンジュ）を旅立つ朝、バスターミナルで家族のお見送りを受けましたが、わずかに二泊とはいえ、別れ際に、バスの車中で別れを惜しんで涙が止まらない生徒も何人かいました。

中学生の多感な時期に、外国での滞在やホームステイ体験ができたことは、彼らにとって大きな財産となることでしょう。また、附属中学校にとっても、今後もコンジュとの交流の輪が益々広がり、深まることを願っています。

奈良に息づく仲間たち



【自然環境教育センター】
<http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/>

自然環境教育センター
准教授 辻野 亮



▲ニホンジカの足跡



▲落角してすぐのオスのニホンジカが田植え前の田圃で雑草を食べている

農地に現れるニホンジカ



白毫寺町に位置する奈良実習園では6枚の田圃で米を育てています。冬の間は田圃の水が抜かれ、春になると雑草が盛んに生育し始めます。5月に代掻きが始まると田の雑草は一掃され、田に水が入ってようやく田植えが行われます。

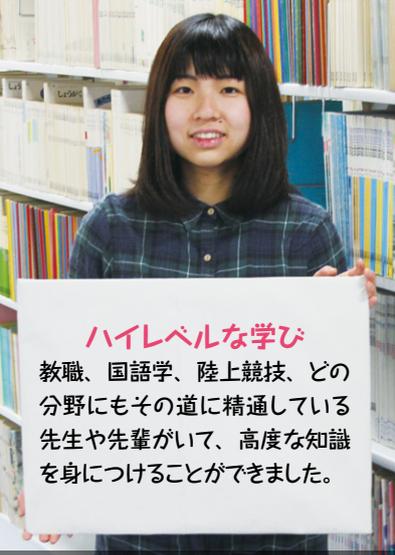
田植え後に雨が降らないと泥地があらわれることもあります。たまたまできたこういう泥地にはいろいろな生き物の足跡が残ります。昼間はまったく見たことがないのにニホンジカの足跡が残されることもあり、彼らが棲息していること

がわかります。

足跡を残すだけなら特に問題はありませんが、もしかしたら育ち始めた苗を踏みつけているかもしれませんし、イネを食べているかもしれません。実習園では、苗代で育てていた田植え前の苗を食べられるという被害が生じました。

昼に活動して夜は休んでいる奈良公園のニホンジカとは対照的に、実習園をはじめとした農地にはどこからか夜にやってくるので、人が追い払って稲を守るというのは難しいのが現状です。

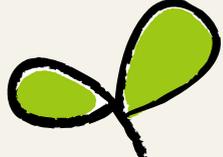
ニホンジカが人の生活圏に入ってきたのかその逆かはわかりませんが、一緒に生きている以上は何らかの妥協点を探っていかなければなりません。



ハイレベルな学び
 教職、国語学、陸上競技、どの分野にもその道に精通している先生や先輩がいて、高度な知識を身につけることができました。

ふなせ かつき
 船迫 早月さん(国語教育専修)

奈良教育生に



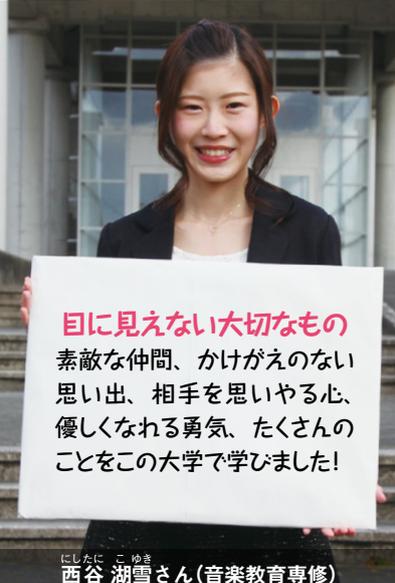
聞きました!

vol.16



探究し学び続ける姿勢
 様々な視点から物事を捉え、学生同士や先生方と議論するのが有意義でした。共に考え、学び合えた仲間感謝しています。

ふじた くにてつ
 藤田 国哲さん(教育学専修)

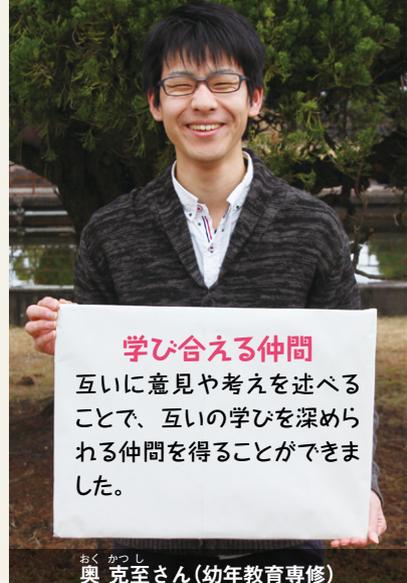


目に見えない大切なもの
 素敵な仲間、かけがえのない思い出、相手を思いやる心、優しくなれる勇氣、たくさんのごことをこの大学で学びました!

にしに ことき
 西谷 湖雪さん(音楽教育専修)

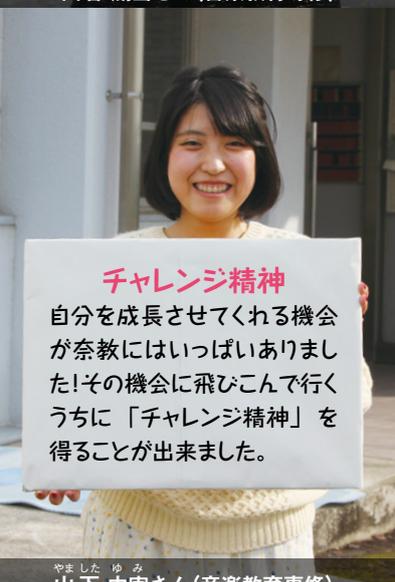
「奈教で得たもの」

卒業生・修了生の皆さん、おめでとうございます。今回は、卒業される皆さんにこの奈良教育大学で過ごした日々を振り返っていただき、何をすることができたのか聞きました。



学び合える仲間
 互いに意見や考えを述べることで、互いの学びを深められる仲間を得ることができました。

おく かつし
 奥 克至さん(幼年教育専修)



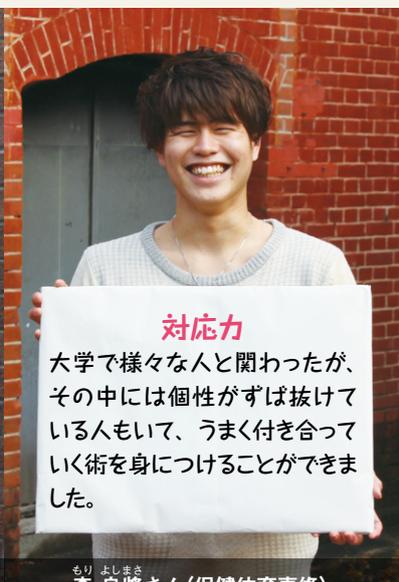
チャレンジ精神
 自分を成長させてくれる機会が奈教にはいっぱいありました!その機会に飛びこんで行くうちに「チャレンジ精神」を得ることが出来ました。

やました ゆみ
 山下 由実さん(音楽教育専修)



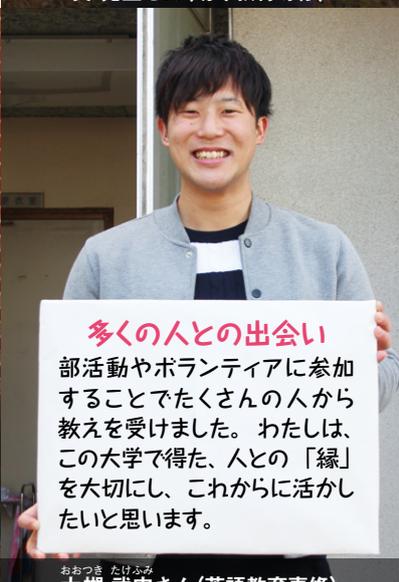
実践力
 日々の講義や教育実習などを通して、全体をみながら一人ひとりの課題を見極めて指導することの大切さを学びました。

かわい あさみ
 河井 麻美さん(保健体育専修)



対応力
 大学で様々な人と関わったが、その中には個性がずば抜けている人もいて、うまく付き合っていく術を身につけることができました。

もり よしまさ
 森 良将さん(保健体育専修)



多くの人との出会い
 部活動やボランティアに参加することでたくさんの人から教養を受けました。わたしは、この大学で得た、人との「縁」を大切に、これからに活かしたいと思います。

おおつき たけふみ
 大槻 武史さん(英語教育専修)



弊誌に関するご意見・ご感想をお寄せください。
 QRコード対応の携帯電話にてアンケートにご回答いただけます。
 皆様からのご意見・ご要望をお待ちしております。



なつきよん's CLUB

広報誌づくりなど、広報活動をお手伝いいただける学生広報スタッフを募集しています。
 興味のある方は総務課秘書・広報担当まで、お気軽にお問い合わせください。



奈良教育大学 広報誌「ならやま」

第51号 平成28年3月23日 編集/広報委員会 発行/国立大学法人奈良教育大学
 3月・7月・10月各下旬発行
 〒630-8528 奈良市高畑町 TEL.0742-27-9104 FAX.0742-27-9141 Email:kikaku-kouhou@nara-edu.ac.jp
 ※広報誌「ならやま」は大学ホームページからもご覧いただけます。
<http://www.nara-edu.ac.jp/>